

鞆らしくない鞆

海野十三

青空文庫

事件引継簿 ひきつぎぼ

或る冬の朝のことであつた。

重い鉄材とセメントのブロックである警視庁の建物は、昨夜来の寒波かんばのためにすっかり冷え切つていて、早登庁はやとうちようの課員の靴の裏にうつてつけてある鋌びようが床にぴったり凍こりついでしまつて、無理に放せば氷を踏んだときのようにジワリと音がするのであつた。朝日は、今ようやく向いの建物の頭を掠かすめて、低いそしてほの温い日ざしを、南向きの厚い硝子ラスの入つた窓越しにこの部屋へ注入して来た。

そのとき出入口の重い扉がぎいと内側に開いて、肥こえた赭あから顔の紳士が、折鞆を片手にぶら下げて入つて来た。

課員たちは一せいに立上つて、その紳士に向つて朝の挨拶あいさつをのべた。みんなの口から一せいに白い息がはきだされて、部屋の方々に小さな虹にじが懸かつた。紳士は一番奥まで行つて、まだ誰も座つていない一番大きな机の上に鞆をぽんと投げ出し、それから後を向いて

帽子掛に、鼠色の中折帽子をかけ、それから頸くびから白いマフラーをとってから、最後に鼠ね色ずみいろの厚いオーバアを脱いで引懸けた。それから身体をひねって、大机にくっついて回る回転椅子をすこし後にずらせて、その上に大きな尻を落着かせたのであった。かくして警視田鍋良平氏は、例日の如くちやんと課長席におさまったのである。

少女の給仕が、縁ふちのかけた大湯呑おおゆのみに、げんのしょうこを煎せんじた代用茶を入れてほのぼのと湯気だったのを盆にのせ、それを目よりも上に高く捧げて持って来た。課長は彼女がその湯呑を、いつもと同じに、硯すずりばこ箱みけつきげつと未決既決の書類函ばことの中間に置き終るまで、じつと見つめていた。

少女の給仕が、振分け髪あしの先つぽに、猫じやらしのように結んだ赤いリボンリボンをゆらゆらふりながら、戸口近い彼女彼女の席の方へ帰って行くのを見送っていた田鍋課長は、突然竹法たけけ螺ほらのような声を放って、誰にいうともなく、

「あーア、昨夜から、何か変ったことはなかつたかア」

と、顔を正面に切つていった。そして手を延ばして大湯呑をつかむと、湯気あのたつやつとを唇へ持つていった。破れ障子やぶいしやうじに強い風が当たったような音をたてて彼は極ごくく熱あつのげんげんのしょうこを啜すすった。近來手強い事件がないせいせいか、どうも腸の工合がよろしくない。

ばたんと机に音がして黒表紙の帳簿ちようぼが課長の前に置かれた。「事件引継簿ひきつぎぼ第七十六号」と題名がうってある。課長は大湯呑を左手に移し、右手の太い指を延ばして帳簿の天頂つぺんから長くはみ出している仕切紙をたよりにして帳簿のまん中ほどをぼんと開いた。その頁には、昨日の日附と夕刻の数字とが欄外らんがいに書きこんであり、本欄の各項はそれぞれ小さい文字で埋うまっていた。

〃——省線山手線内廻り線の池袋駅降り電車が、同駅ホーム停車中、四輛目客車内に、人じん事不省んじふせいの青年（男）と、その所持品らしき鞆（スーツケースと呼ばれる種類のもの）の残留せるを発見し届出あり、目白署に保護保管中なり。住所姓名年齢不詳ふしょうなるも、その推定年齢は二十五歳前後、人相服装は左の如し……”

課長はそのあとの文字を、目で一はけ、さっと掃はいただけでやめ太い指で紙をつまんで、次の頁をめくった。

次の頁は空ブランケ白だった。

（さっぱり商売にならんねえ）

と、課長は、刑事時代からの口癖になつていゝ言葉かすを、口の中でいってみた。ぼたりと微かな音がした。茶色の液えきの玉が空白の頁の上に盛上つて一つ。課長は大湯呑を目よりも

上にあげて、湯呑の尻を觀察した。それからその尻を太い指でそつと撫でてみた。指先は茶色の液ですこし濡れた。課長はすこし周章あわてて茶碗を下に置きかけたが、机に貼りつめている緑色の羅紗ランヤの上へ置きかけて急にそれをやめ、大湯呑は硯すずりばこ箱の蓋の上に置かれた。

課長の仕事は、まだ終っていないかった。事件引継簿の頁の上にはげんのしようこの液の玉が盛上っていた。課長は、机の引出から赤い吸取紙を出して、茶色の水玉の上に置いた。吸取紙は丸く濡れた。その吸取紙を課長が取ってみると、帳簿の上の水玉は跡あと片かたなく消え失せていた。課長の当面の仕事は終った。

おれの次の仕事は、何時になったら出来てくるのであろうか——と、課長は背のびをしながら、両手を頭の後に組んだ。

失しつ踪その博士

いつもなら、そういう面会人は必ず応接室へ入れるのが例になっていたが、今日ばかりは特別の扱いで、課長はいそいそと席から立って指図さしずをし、その面会人を自分の机の横の席へ通させたのである。ちようどその日のお昼前のことであつた。

面会人は白井藤吾とうごという姓名の青年であり、この白井青年を紹介して来たのは、課長と同郷の大先輩である元知事目賀野俊道めがの氏であつた。しかし課長は、この大先輩に対し、あまり尊敬の念を持合わせてはいなかつた。

「実は重大人物が行方不明となりましたものですから、特に課長さんの御尽力ごじんりょくに縋すがりたいと存じまして、目賀野閣下かつかから紹介して頂いたような次第でございます」

青年白井は、ポマードで固めた長髪を奇妙に振りながら、近頃の青年にしては珍らしく鄭重ていちょうな言葉で挨拶をしたのだつた。青年の赤いネクタイが、その睡眠不足らしい腫れはぼつたい瞼まぶたや、かさかさに乾いた黄色つぼい顔面とが不釣合に見えた。

(目賀野氏はもはや閣下ではない筈ですが……)と皮肉をいつてやりたくなつた田鍋課長だつたけれど、それは差控さしひかえることにして、

「どういふ人物だか、詳しくお話下さらるので、われわれには正体が分りませんが、とにかく家出人の捜査申請そうさしんせいは本庁でも毎日受付けて居りますから、どうぞ届書とどけしよを出され

たい」

と返答をした。

「いや、これは失礼をいたしました。故意にその人物の素性^{すじょう}などを隠そうとしたものはなく、その人物が如何なる人であることを説明するには相当長い説明が要^いりますので、とりあえず重大人物と申上げたわけでありますが……」

「お話中ですが、われわれは非常に多忙でありますし、且^{かつ}又^{また}非常に重大事件を数多抱えて居りますために、なるべくつまらんことでわれわれを煩^{わづら}わさないように願いたい。いやもちろん目賀野先生の紹介状に対して敬意を表しないというわけではありませんが、とにかく本課では目下数多の重大事件を抱えこんでいる——今も申した通りですが、例えば某研究所から二百グラムという夥^{おびただ}しいラジウムが盗難に遭い目下重大問題を惹^{しやつき}起してまして、本課は全力をあげて約四十日間捜^{そうさく}索を継続してはいますが、今以て何の手懸りもない——迷^{めいきゆう}宮入り事件くさいですがね、これは……、それだとか次は……」

「お話を恐れ入りますが、他の重大事件には私は殆んど関心を持って居りませんので。はい、只^{ただ}々^{ただ}重大人物博士の失踪^{しつそつ}について非常なる憂^{ゆう}慮^{りよ}と不安と焦^{しやう}燥^{そう}とを覚えている次第でございます」

「失踪事件ならば、先刻も御教えしたとおり家出人捜査申請をせられたい」

「それは分つて居ります。しかしですな、その博士はあまりに重大なる人物でありまして、普通の失踪捜査申請などをしていただけの間には間に合わないでございます。況んや博士に於ては家出せられるほどの事情は痕跡ほども持つて居られない。従つてこれは博士を誘拐したと見なければならぬ甚だ重大刑事事件であります。果して然らば、刑事部捜査課長たる足下が当然陣頭に立つて捜査せらるべき筋合のものであると確信いたします」

「一体誰ですか、その重大人物博士とやらいうのは……」

「赤見沢博士のことです。あの有名な実験物理学の権威、そして赤見沢ラボラトリーの所長、万国学士院会員、それから……いや、後は省略しましょう。ここまで申せば、課長さんも赤見沢博士の重大人物たることをよく御了解になるでしょう」

「もちろんです」課長は勢い上、そう応えなければならなかつた。「赤見沢先生が失踪されたとは、これは初耳ですな。それは何時のことですか」

「昨夜以来、お邸へお帰りが無い。お邸と申しましても、それはラボラトリーの一室です。……。私は昨夜はお目に懸る約束になつていたので博士の御帰りを待つて居りましたが、遂に博士はお帰りにならず、本日午前十時になつても姿をお現わしになりません。それ故

にこれは大変だと思ひ——今までそんな約束ちがいは一度もありませんでしたからな——それで目賀野閣下に御相談をし、こちらへ駈付けましたような訳です。如何です。昨夜何か都下において血ちなまぐさ腥せきき事件でもございませんでしたでしょうか」

白井はきり錐きりのように鋭く問い迫る。

「昨夜は極きわめて静せい穩おんでしたな。報告するほどの事件は一つもなかった。いや、正確に申せば只一件だけあった。深夜池袋駅しんや停どまりの省線電車の中に、人事不省になった一人の男が靴と共に残っていたというだけのことです」

「えつ、靴と仰おつしや有あいましたか」

「ああ、靴——それはスーツケースらしいですが、それが車内に残留していたので、その人事不省の人物の所持品じやろうと……」

「その人事不省の男というのは、どんな男でしたか。年齢はどのくらい……」

「二十五前後の青年男子だと報告して来ています」

「ああ、それじゃ違ちがう。赤見沢博士は確たしか本年六十五歳になられる老ろう体たいなんですからね」
「それはお気の毒」

と課長はいつて、事件引継簿を書類函ばこの既決きけつの函の中へ、ばさりと投げ入れた。

仔猫こねこの怪かい

面会人白井は、なかなか尻を上げようとはしなかった。

「これは一つ、今日只今課長さんによく認識して頂かねば、僕は帰れません。そもそも赤見沢博士の重大性なるものは……」

「粗茶そちやですが、どうぞ」

少女の給仕が茶を入れて持って来て、白井の前に置き課長の大湯呑にはげんのしょうこをつぎ足して来た、課長は客に粗茶をどうぞと薦すすめたわけだ。

「ああ結構です」と白井は香かのない茶に咽喉のどを湿しめし、「早く分つて頂くために、そうですねあ、ああそうだ、仔猫こねこのお話をしましょう」

「仔猫？」

「そうです。猫の子ですなあ」

課長の前の既決書類函から書類を取出していた少女の給仕は、猫の子問答のおかしさに耐えられなくなつて、書類を抱えると大急ぎで後向きになつて、すたすたと戸口の方へ駆出した。

「猫の子がどうしたというんです」

「課長さん。僕が博士を始めて訪問したときに、その部屋に仔猫がいたんです。僕はびっくりして腰を抜かしそうになりました」

「君はよほど猫ぎらいと見える。ははは」

「いや違う。総じて猫というものは僕は大好きなんです。だから普通では猫又を見ようが腰を抜かす筈がない。だからそのときは愕きましたよ、実に……なぜとってその仔猫がですね、宙にふらふら浮いているじゃないですか、びっくりしましたね」

「どうしてまたその仔猫は宙に浮いていたのですか。天井から紐でぶら下げてもあつたのですか」

「そんなことなら、僕はきやツなどと恥かしい声を出しやしません。その仔猫たるや、紐でぶら下げられたのでもなく、風船で吊上げられているのでもなく、宙にふわふわと……」

「それは本当の猫じゃないのでしょうか」

「本當の猫です。あとで僕はさわつてみましたから、知っています。もつともこの仔猫は赤い腹掛はらかけをしていましたかね」

「腹掛のせいじゃないでしょう、宙をふわふわやるのは……」

「さあどうですかなあ。とにかく赤見沢博士という大学者は仔猫を宙に浮かせるような奇妙な実験をしてみせる、恐るべき人物です」

「それは魔法かな、奇術マジックかな」

「奇術でしような。博士はそのときいつていました。これは正しい学理に基く一つの実験なんだ。決してこの猫は化け猫ではないと説明されたんです」

「君はその種を知っているのでしょうか。さあ聞かせて下さい」

田鍋課長は、先刻せんこくとすっかり立場をかえ、白井の語るのを催促さいそくした。

「僕には分かりません」白井はそういった。本當に知らないのか、それともわざと説明を逃げたのか分かりかねる。「とにかくそういう重要人物なんですから、ぜひとも一刻も早く赤見沢博士を探し出して頂きたい」

「うーむ」

課長は呻うなつた。わが命令を出すのは極めて容易よういであるが、そういう奇術師だか理学者だ

か分らない変な人物を探し出すのに大掛りなことをやって、後でもの嗤わらいにならないであろうかどうかを心配した。

課長の返事はなかなか出て来なかった。その間、白井青年はしきりにかきくどいた。課員が、課長の前の未決書類函へ帳簿を入れていった。それは、さつきからそのへんをまごまごしている黒表紙の事件引継簿であった。

「とにかく……まあとにかく、私から係へよく話をして置きましょう。それで、博士の相書や——写真があれば更にいいですね——それから失踪の時刻やそのときの服装、その他参考になる事柄を出来るだけたくさん書いて私の許まで提出されたい。私としては出来るかぎりの御便宜はかをお図るわであります。どうぞ目賀野先生へよろしく」

そういうわれれば誰でも面会の終おわりへ来たことに気がつくものである。白井青年は、いい足りなさそうな顔付で、その部屋を出て行った。

白井の姿が部屋から消えると、課長はその途端とたんに彼から頼まれたことを一切忘れてしまった。これは永年に互る課長の修養の力でもあつたり且かつ又また習慣でもあつた。〴〵ものごとを記憶するよりは、出来るだけ忘れよ〴〵という金言があつたと確信している田鍋課長であった。

だが課長は、間もなく白井から頼まれたことをはつきり思い出さないわけにはいかない運命の下もとにあつた。それは彼が忠実に未決書類函へ手を延ばし、黒表紙の引継簿の仕切紙の挟はまつているところを開いて読んだときに、そうなつたからである。

その頁は、昨夜の池袋駅事件につき、第二報告書が赤インキで書き入れてあつて、

“——前記姓名未詳みしやうの男は、二十五歳前後の青年にあらずして、実は六十五歳前後の老人なること判明せり。かく判明せる原因は、該要保護人がいを署内（目白署）に收容せる後に至りて、該人物が巧妙なる鬘かつらを被り居たることを発見せるに因るよ。尚、同人所有のものと思われる鞆そなは、赤革のスーツケースにして、大きさに不相応なる大型の金具及び把ハンドル手を備え居り、その蓋を開きみたるに、長さ二尺ばかりの杉角材が四本と古新聞紙が詰めありたる外ほかめぼしきものも、手懸りてがかとなるものも見当らず。

一方、前記要保護人は、收容後十時間を経るも未だ覚醒かくせいせず、体温三十五度五分、脈み搏やくはく五十六、呼吸十四。その他著しき異状を見ず。引続き監視中なり。——”

とあつたので、課長はそれと気付き、立去つた白井青年の後を課員に追わせたが、遂に彼の姿を見つけることが出来なかつた。課長としては、果して目白署に保護中の当人と赤見沢博士とが同一人だかどうかは不明だが、年齢がちょうど博士と合うので、損そんと思つて

も、行ってみてはどうかと白井にすすめるつもりだったのである。

研究生すみれ嬢

白井は、ぼんくらではなかったと見え、その足ですぐ目白署を訪ねている。

やっぱり、赤見沢博士であつた。

彼は署の電話を借りて、とりあえず目賀野に知らせた。目賀野は愕おどろいて、すぐ博士を引取りに行くからといった。

それから一時間ほどして、目賀野は医師やら博士の姪めいの秋元千草という麗れい人じんや博士の助手の仙波学士を伴い、自動車で駆けつけた。そして一いっさつ札はを入れ、人事不省じんじふせいの博士と遺い留りゆうの鞆かばんとを内容物もろとも引取つていったのであつた。

博士を護つて、一行は目黒めくろ行人坂の博士邸へ入つた。

雑用係の川北老夫妻と、研究生小山すみれ嬢とがびっくりして博士の帰邸を迎えた。

目賀野の指図さしずで、白井は出迎えた人々を掴つかえて話をした。

「わしは存じて居りましたがす」と川北老はいった。「先生さまが変装なすつて、そつとお出懸でかけになるところを確たしかに見て居りました。はい、トランクをお持ちになつていましたなあ。おお、このトランクに違いありません。色といい形といい大ききといひ……。先生さまは外出なされるとき必ず若い男になつてお出懸けなさるんで、これは昨夜にかぎつたことではございません。そのこみ入つた理由わけはわし如き者に分ろうはずはございません。お出懸け先でございませるか、それは全く存じません。先生さまは、爺じいや、これからどこへ行つてくるぞなどと仰おっしゃ有るお方じやございませぬもんな。……坂をのぼつて目黒駅の方へお出でなさつたことだけは間違ひねえでがす」

博士の昨夜の行動について喋しゃべつたのはこの川北老だけであつた。他の妻君のお綱婆さんも、小山研究嬢も、共になんにも語らなかつた。

白井は、目賀野の指図で、もう一つの重大申入れを留守番の人々に行つた。

「実は、僕はこの前からしばしばこちらへ伺つて博士に或る物の御製作をお願いしてあつたんだ。昨日はその出来上つたものを僕の許もとへお届け下さるお約束の日だつた。博士はこのトランクに入れて、僕のところへ向われたんだが、その途中であのような病びょうたい態とな

られた……」

そういつているときに、目賀野が連れていた医師が入って来て、博士の容態ようたいについて報告した。目下麻痺まひ症状がつづいている。その原因は不明である。しかし急変はないと思うから、当分このままにそつと寝かして置くがよろしく、次第によって明日か明後日から滋養じようかんちよう浣腸せんじようなどを始めることにしたいというのだった。目賀野は目くばせをして、医師をこの部屋から去らせた。そして白井の腰の上を肘ひじでついた。

「……そこですね」と白井は小山研究生と川北老夫妻へ気ぜわしく話しかけた。「このトランクとその中身とを、僕に預けていただきたいんですがなあ。もちろん博士が意識を回復されればそのとき改めて博士に申入れるつもりですが、それまでのところを、僕に預けておいて頂きたい。そしてかねがねその代償として博士にお支払いすることになっていた金十万円也を、今ここに置いて参りますから、それならあなた方も承諾して下されやさいと思う。ね、いいでしょう」

そういつて白井は、十万円さつたばの紙幣束しへいを三人の方へ差出した。三人は鶏とりのようにびっくりして、隅すみへ固まって相談をはじめた。

やがて相談がまとまったと見え、三人は白井の方へ戻って来た。川北老が代表者となっ

て折衝せつしょうの任に就くものと見えた。果然彼は発言した。

「とりあえずわしら留守番の者が相談ぶつたんですが、その大金はお預りしますまい。その代り品物の何と何とを持って行かれるか、その品目を書いた借用証を一札入れていつて下せえ。小山さんもそういわつしやるだ」

白井の眼が小山すみれ嬢の方へ動いた。すみれ嬢は猫のように大きな目をじつと据すえて、白井の顔を睨にらみかえした。

「承知しました。そうしましょう」白井は目賀野の信号によって、そのように返事をした。それから小机の上に紙を延べて借用証を書き始めたが、その品目を書くについてトランクをあける必要にぶつかつた。開いて中を見せれば、すみれ嬢の大きい目は白井の脳髓を突き刺してしまふだろう。彼は、そうした。

「ええー、よくごらん下さい」

すみれ嬢は、トランクの中を嘗なめんばかりにして入にゅう念ねんに改めた。彼女が用を終つて顔をあげたのを見ると、その面おもてにはほつとした色があつた。

「よくごらんになりましたね。品書は、一つトランク、一つ木材四本、一つ新聞紙じやっか若か干ん、以上——でいいですね」

すみれ嬢が川北老に目配せをしたので、川北老が、「はい。それでようがす」と返事をした。

臼井は記名捺印なついでんをして、その預り証を川北老に手渡した。川北老はそれをすみれ嬢に見せ、嬢がうなずくと、それを八つに畳たたんで、胸のポケットに収しまめて、ボタンボタンをかけた。

取引は終わった。

目賀野と臼井は挨拶をして、玄関を出た。待たせてあった自動車の中には、さつき活躍した医師と、若い男女が各一人待っていた。その若い男女は、さつき目白署において、博士の姪の秋元千草と博士の助手たる仙波学士と名乗った二人であったが、この二人はこのさわぎを他処よそに自動車を下りもせず、ぼかんとしていた。それもその筈、実は両人は博士の姪でもなく助手でもなく、目賀野が便宜べんぎ上連れて来た脇役の人物であったのだ。その便宜とは、もちろん署から疑いを持たれることなしに、博士と鞆とを引取ることにあつた。こうなると目賀野という人物は、なかなか油断のならない重要人物であることが知れて来るが、彼の本来の面目は次の章に於おいて一層よく知れよう。

秘密地下室

省線たはた田端駅を下りて西側に入り、すぐ右手の丘をのぼり切るとそこに目賀野邸があつた。鞆を護衛した目賀野たちの自動車すべが、邸内に滑りこんだ。

玄関にとびだして来た書生が三名。自動車の扉が明いて、ぴよんととび下りたは目賀野であつた。

「さあ、こつちへ寄越せ」

と、目賀野が伸ばす手に、車内から続いて現われた白井が例の鞆を手渡す。

「おい白井。お前だけ、わしについて来い。外の奴は、邸のまわりを嚴重に警戒して居れお」

目賀野は素晴らしいすてて、鞆を大事に片手にぶら下げて、どンドン奥へ入つていった。

白井は遅れまいと、そのあとを追う。

自動車から最後に下りた草枝と千田が、顔を見合わせてにやりと笑つた。二人は連れ立つて、別の小玄関から上にあがつた。

目賀野は、廊下をどンドン鳴らして、奥へ奥へと入つていった。一等奥に、洋間があつ

た。彼はポケットから鍵束を出して鍵を探していたが、やがてその一つを鍵穴に入れて廻した。

重い扉は、始めて開いた。

目賀野は靴を持って、中へ入った。

「臼井。うしろを閉めろ」

「はい」

扉が閉められた。と、自動式に錠がぴしんと掛った。

この洋間には、窓が一つもなかった。しかし天井からは豪華なシャンデリアが下って、あたりを煌々^{こうこう}と照らしていた。大理石のマンテルピース、一つの壁には大きな裸体画、もう一つの壁には印度更紗^{サラサ}が貼つてあった。立派な革椅子に、チーク材の卓子など、すこぶる上等な家具が並んでいて、床を蔽^{おほ}う絨^{じゅうたん}氈^{たん}は地^ぢが緋色^{ひいろ}で、黒い線で模様がついていた。

隅のところ、上から見ると三角形になっている隅の飾戸棚^{ガラスビ}があった。目賀野はその戸棚の硝子戸^{ガラスビ}をあけた。洋酒壇が並んでいた。

その中は、瓢箪^{ひょうたん}筆を立てたような青い酒壇があった。目賀野はその酒壇の首を掴^{つか}むと

外に出し、もう一方の開いた手を戸棚の奥へ差入れた。そして何か探しているらしかったが、すると突然、裸体画のはいつた大きな額縁がくぶちが、ぐうつと上にあがったと思うと、そのあとにぽっかりと四角い穴が開いた。そしてその穴の中に、地下室へ続いているらしい階段の下り口が見えた。

「白井。その鞆を持って、こつちへ下りて来てくれ。鞆は大切に取扱うんだぞ」

「はい、承知しました」

目賀野のあとについて、白井は鞆を持って秘密の階段を下へ降りていった。

下には十坪ほどの秘密室があった。この外にも倉庫や地下道や抜け穴などがあった。目賀野自慢のものであった。

「さあ、鞆をここへ載せて……そしていよいよ赤見沢博士きんせい謹製まかの摩訶不思議なる逸品いつびんの拝観と行こうか」

目賀野は、童のようににこにこ顔だ。

白井が鞆を卓上へ載せる。

「開いていいですね」

「ああ、あけてくれ。丁重ていちょうに扱あつかえよ」

「はあ」

白井は、鞆についている金色の小さい鍵を使って、そのスーツケースを開いた。

鞆の中には杉の角材かくざいと見えるものが四本と、新聞紙と見えるものが十四五枚が入っていることは、さつき調べたとおりであった。

「さつきは、ひやひやしたよ。これを調べているうちに一件がもそもそ動き出しやしないかなあと思つてね」

「はあ」

「とにかく、ひどく心配させたが、これをこつちへ引取ることが出来たのは非常な幸運だった。——いや、君の骨折ほねおりも十分に認める。さあ、その材木みたいなものを、外に出したまえ。そつと卓子へ置くんだよ。乱暴に扱うと、急に跳ねだすかもしれないからなあ」

目賀野は、なんだか訳のわからない無気味なことを喋しゃべって大恐悦だいきょうえつの態ていであった。

白井は、鞆の中から角材を出した。四本とも皆出して、卓子の上にそつと置いた。また新聞紙も皆出した。鞆の中は空っぽになった。

「さあ、これでいい訳だ。おい白井、その鞆を閉じてくれ」

目賀野の命令どおり、白井は鞆の蓋をばたんと閉めた。

目賀野の顔は、いよいよ緊張に赭味を増した。彼の目は鞆に釘づけになっている。が、そのうち彼の目は疑惑に曇りを帯びて来た。

「どうもおかしい。鞆はおとなしい。おかしいなあ。……ああ、そうか。白井。その鞆に鍵をかけてみる」

白井は命ぜられるとおりに、鞆の錠に鍵を入れて、錠を下ろした。

鞆は卓上に於て、再び熱烈な目賀野の視線を浴びることとなつた。

四五分経つと、目賀野の顔がすこし蒼ざめた。彼は鞆の傍へ寄ると、いきなり鞆を上げ、力いっぱい振つた。

それがすむと、彼は鞆をもう一度、そつと卓子の上へ置いた。それから、じつと鞆を注視した。

彼は小首をかしげた。

もう一度鞆を抱きあげると、上下左右へ激しく振つた。それがすむと、卓子の上へ戻した。但しこんどは鞆を横に寝かせて置いた。

彼は腕組をして、鞆を睨据えた。

一分二分三分……彼の顔は硬ばつた。と、彼はその鞆を手にとるが早いか、どすんと白

井の足許へ投げつけた。

「な、なにをなさるんです」

白井の顔も蒼くなつた。

「ばかッ。この靴は、ただの靴じゃないか。こんなものをありがたく受取つて来て、どうするつもりか」

目賀野は、満身朱盆しゅぼんのようになって、白井を怒鳴りつけた。

「ただの靴だと断定するのは、まだ早すぎると思います。もつとよく研究してみるべきではないでしょうか」

「駄目だ。これだけ色々やってみても、がたりともせんじやないか。ただの靴に過ぎないことは明白めいはくだ。赤見沢博士謹製のものならこんなことはない」

「おかしいですね。……博士はこの靴と共に警察署へ保護されていたんで、間違いはない筈なんですがね。それとも……」

と、白井はしばらく自分のおでこを指先でつまんで考えこんでいたが、そのうちに彼は指を角材の方へ指した。

「ああ、これだ。この杉の角材ですね。この中に博士の仕掛があるので。閣下の御ごちゆ

註文のとおり鞆にして置くと目に立つという心配から、仕掛はこの角材の中に秘めて邸から持ち出されたんじゃないでしょうか。いや、それに違いありません。そうでもなければ、ねえ閣下、鞆の中に杉の角材などを大事そうに収めておくわけがないですよ」

白井は、勇敢なる説を立てて、目賀野を説服にかかった。

「杉の角材の中に仕掛があるというのか。それはどうも信ぜられないね。しかし念のため、調べてみる」

目賀野は白井を督励して、四本の杉の角材を手にとるやら耳のところまで振ってみるやら、それから目方を考えてみるやらして、さまざまな診察を試みたが、その結果は、杉の角材であるという以外の化物ではなさそうであった。

「貴様のいうことは出鱈目だ」

目賀野は再び激昂に顔を赭くし始めた。

「待つて下さい。博士の仕掛は、この角材の中にしつかり入っているんでしようから、この角材を鉋で割ってみましょう」

白井は、部屋の隅の函の中から鉋を出して来て、角材をぼかりと縦に二つに割った。それから中を調べた。が、それは杉の角材であるに十分であったが、他の何物をも隠してい

なかつた。

白井は、次々に残りの角材をぽかりぽかりと割つてみた。すべては、只の角材であるという以外に、何の新発見もなかつた。

「それ見ろ。なんにもないじゃないか。貴様は恩知らずだ。底の知れない鈍物だ。ああ貴様のような奴は、もうわしのところへは置いておけない。とつとと出て行け」

ふいうち
不意討

白井の顔が、酒に酔つた人のように真赤になる。目賀野の顔色はすごいまでに蒼い。
「こんなにまでして貴方に尽しているのが分らんですか」

白井が残念そうに声をふり絞つた。

「わしの命令から逸脱するような者をこのまま黙つて許しておけると思ふか。事の破綻はみんな貴様のよけいなことをしたのに発している。こんな鞆が何に役立つ。この材木は

一体何だ。風呂桶ふうおけの下で燃すのが精一杯の値打だ」

「そんな筈はないんですがなあ。もつと慎重によく調べさせて下さいよ」

「その必要はない。何もかもおれには分つとる。おまけに博士をあんなに生ける屍しかばねにしてしまつて。……わしの計画は滅茶滅茶めちやめちやじゃないか」

「博士は外出時に変装するということを貴方が僕に注意しなかったのが、そもそも手落ちですよ」

「博士のラボラトリーの前から警戒監視すべきが当然だ。しかるに貴様は骨を惜んで田端駅で待つていた。横着者おうちやくものめ。そして博士が到着しないと分ると、そこで初めて目黒へ駆けつけた。そのときはもう後の祭だ。博士はもの言わぬ人となつて目白署へ収容され：：：そうだ、まだ貴様にいうことがあつた。貴様は田鍋のところではよいなことを喋しゃべつたな。知っているぞ、ちゃんと知っている。博士の部屋へ入ると、猫の子が宙に浮いてばたばたやつていたと喋つたろう。それから博士に仕事を頼んだことまでべらべら喋つちまつたんだらう。どうだ、それに違いなからう」

「それは……それは、そういわないとあの場合、捜査課長の心を動かすことが出来なかつたからです」

「バカ。捜査課長にあれを連想せしめるような種を提供して、わしの方は一体どうなると思うんだ。田鍋のやつは、勘は鈍いが、あれで相当克明こくめいでねばり強いから、そのうちにはきつと一件を感じづくに違いない。そうなったら……ああ、そうなったら万ばん事休じきゅうすだ。わしの最後の一線が崩れ去るのだ。憎い奴だ、貴様は……」

「まだ投げるのは早いです。打つべき手は、まだいくらでもありません。こんどは間違なげういなくやります。一命を抛なげうつてやります。命令して下さい」

「貴様に対する信用はゼロなんだが……よしもう一度使つてやる。いいか、こうするんだ。田鍋のところへ行くんだ。さっきの十万円で買収だ。買収に応じなかつたら田鍋の奴を早いところ誘拐ゆうかいしてしまえ」

「はい」

と、電話が外から懸つて来た。

目賀野は電話器を取上げた。彼は簡単な返事をして電話を切った。彼の奥歯がぎりぎりと鳴っていた。

「臼井、早くしろ。十万円はその書類棚の上に入っているから、開いて出したまえ」

「はあ」

白井は書類棚のところへ行つた。と、彼の脳のうてん天にはげしい一撃が加わつて、彼は意識を失つてしまつた。

目賀野は、ほつと一息ついて、手にしていた丸い盆を、隅の卓子へかえした。それから隣室へ通ずる扉を開いて、大声で呼んだ。すると、いつぞやの若い男と女とが、奥からとび出して来た。それを見ると、目賀野はいつた。

「一時この邸から退去せにやならなくなつた。千田はこの白井を担かついで霊岸橋れいがんばしへ行つて、辰馬丸に乗込んですぐ出てくれ。行先は石いしの巻まきだ、草枝はもんぺをはいてわしといつしよに来てくれ。松戸へ出てから、すこし歩くことにするからなあ」

そういつているとき、天井に取付けてある高声器が、がらがらと雑音を出してから、ひとりで喋りだした。

「警視庁の自動車が門前に停りました。三人の紳士が今玄関に立ってベルを押しています。一番えらそうな紳士は鼠色ねずみのオーバーを着た大男です……」

そこまで聞くと、目賀野は万事を悟つた。

「捜査課長の田鍋が来たんだ。さすがに早く気がついたな。さあ千田、今のうちに地下道を通つて長屋から出て行け。草枝は裏から抜け出る。そして松戸の駅前丸留の家で待つ

ているんだ。もんぺはそこで借りりやいいぞ」

目賀野はそういつて命令を伝えると、彼自身は隣室へとびこんで、ぱたりと扉を閉じた。

鞆の怪談

田鍋課長一行は、一向要領を得ないで、目賀野氏が留守だという邸から引揚げた。もし課長が、今しがたその地下室での出来事を勘づいていたら、そのように温和おとなしく帰りはしなかつたらう。

目賀野は行方不明となった。だが、田鍋は別に大して重要と思わないから、捜査命令を出しはしなかつた。その代り彼は赤見沢博士の容態ようたいには十分の警戒を払い、専門の警察医を附添わせた。

こうして、何だか正しょうたい体の分らないこの妙な事件は、田鍋課長側と目賀野側との間に喰いちがいのあるままでそれから先を別々に進行していった。

白井は、あれから船に乗せられると間もなく正氣づいたが、自分が船内に軟禁なんきんされている身の上であることを、千田から話されて知った。こうなれば当分温和やんべいしくしているより仕方がない。そのうちに千田や船員が油断ゆだんをするだろうから、脱出も出来ようと考えた。但し脱出したのがよいか、しないで辛抱しんぱうしていた方が安全か、これは篤とくと考えてみなければならぬ問題だと思つた。

ちようどその頃、東京に一つのふしぎな噂が流れはじめた。それは怪談の一種であるとして取扱われていた。人影もない深夜しんやの東京の焼跡やけどの街路を、一つのトランク鞆かばんがふらりふらりと歩いていて、そのトランクを手に下げている人影も見当らないのに、トランクだけが宙をふわりふわりと揺ゆれながら向こうへ行くのを見たというのだ。

もし事実なら、奇々怪々ききかいがいなる出来事だといわなければならぬ。

その怪事を目撃者というのは、焼跡に建っている十五坪住宅の主人で、昼間は物品のブローカーのぞをしている人だったが、その人が夜中厠かわやへ入って用を足しながら何気なく格子の外を覗のぞいた、折柄おりから二十日あまりの月光が白々と明るく一面の焼跡と街路を照らしていたが、そこへ突然かのトランクが現われて、主人の目の前をすたすたゆらゆらと通り過ぎていったのだそうなの。

「寝呆ねぼけていたんじやねえよ。へん、この世智せち辛い世の中に誰が寝呆ねぼけていられませうかというんだ。信用しなきやいいよ。とにかくおれは、ちゃんとこの二つの眼で靴の化物を見ただから……」

と、その目撃者はたいへん自信に充ちて放言ほうげんしたという。

だが、およそ常識のある者なら、かの自称目撃者の言葉を信じようとは思わないだろう。

奴やつこ 風船なら知らぬこと、重いトランクが横に吹き流れて行くとはい思われない。

では、トランクの幽霊ゆうれいか。トランクに霊あるを未だ聞いまいたことがない。

結局この噂話うわさばなしは、一篇の笑話と化して笑殺しょうさつされるようになったが、その頃、また別の噂うわさが後詰ごづめのような形で伝わり始めた。それはやつぱり靴変化へんげに関するものであった。

何でも新宿の専売局跡の露店街ろてんがいにおいて、昼日ひるひな中のことだが、ゴム靴などを並べて売っている店に一つの赤革の靴が置いてあったが、この靴がどうしたはずみか、ゆらゆらと持上って、ゴム靴の海の上をすれすれに往来へ出ていったのである。店番をしていた若者はびつくりして後を追おい駈かけた。幸いその靴は隣の店の前あたりをうろろしていたので、かの店員は靴に追いついて、左右の手をもって靴の両脇から抱だき留めたのである。これは重大な事柄であると後に分ったことであるが、そのときかの店員が靴を取り押えたときの

筋^{きん}圧^{あつかん}感^{かん}はといえば、一向鞆を取り押えたような気がせず、なんだか幕に手をかけて引いたように感じた由^{よし}である。つまり非常に軽々と感じ、そして少し遅れて慣^{かん}性^{せい}のようなものをも感じたというのである。

その店員の感想にはもう一つ附加えるべきものがあつた。それは彼が手を取押えたトランクの横腹から、そのトランクの把柄^{はへい}へ移し、トランクをさげたときのことであるが、彼はずつしりとしたトランクの重さを急に感じたというのである。それはなんだか俄^{にわか}にトランクの中へ或る重い物が入つたように感じたのである。そこで彼は念のためトランクをゴム靴を並べてあるその上に置くと、トランクの懸^{かけ}金^{がね}をひらいて開けてみた。が、トランクの中には何も入っていなかつた。全くからっぽであつたのだ。

彼は拳固^{げんこ}をこしらえると自分の頭をごつんと一撃してからそのトランクの口を閉^しめて再び店の一隅へ並べた。

しばらくは何事もなかつた。

ところがそれから二三分経つたと思われる後のこと、例のトランクは再び、のそのそと店から外へ匍^はい出^だしていつたのである。店員はそれを見て知っていた。そのトランクを後から抱き止めなければ損をする虞^{おそ}れがあるという気持と、気味がわるくて手が出せない

という気持が、彼の心の中で闘いを始めた。そのうちに靴は往来へ飛び出し、彼の眼界から失せた。そこで彼の心の中に怫然ふっぜんと損得観念が勝利を占め、彼はゴム靴の海をまたぎで躍り越えて往来へ飛び出した。そのとき彼はなぜか声が出なかつたそうである。大声で叫んで人々を集めればよろしかつたのにも拘らずかかわ、なぜか無言のままだった。それは多分、そのとき軽率けいそつに叫び声をあげて人々にこの事件を知らせたが最後、結局は彼自身の頭が変になっていたんだなどと後に指摘されることになってはいやだと思つたらしいのである。

トランクはどこへ行つたらう。

店員はそれを発見するのに大して骨を折らなかつた。その赤革のトランクは、金色の金具を午後の太陽の反射光で眩まぶしく光らせながら、広い道路を半分ばかり渡り、地上約三尺ばかりの高度を保つて、なおも向いの側の人道へ辿りつこうとしていた。

と、左の方から一台のトラックが疾走しつそうして来て、呀あつとという間にそのトランクに突きあつた。トランクは、フットボールのように弾かれて上へ舞いあがつた。と思う間もなく下へ落ち始めた。するとその下へトラックの車体がすうつと入つて来て、トランクを受け留めた。そのトラックは空であつた。そのトラックは、始めトランクに突き当つたそれ

だった。かくしてそのトラックは速力を緩めることなしに、店員にガソリンの排気をいやというほど引掛けて遠去かかっていつてしまったのである。

店員は、トラックの番号を覚えることさえ忘れて、呆然と立ちつくしていた。なんと
 という気味のわるいトラックだろう。豚のように跳ねあがり、通りすがりのトラックへとび
 こんで逃げてしまいやがった。これで、今朝、顔色のわるいカーキ服の男から三百円で買
 い取った品物をなくして、三百円丸損となつてしまつたぞと、大いに恨めしく思った。

この話が、誰から誰へとなく拡がって行つたのである。

怪異は続く

東京朝夕新報の朝刊八頁の広告欄に、氣のついた人ならば氣になつたであろうところの
 三行広告が二つ並んで出ていた。

○紛失、赤革トランク、特別美且大なる把柄あり、拾得届出者に相当謝礼、姓名在社三二

五番

もう一つは、次のとおりであった。

○紛失、赤革トランク、特別美且大なる把柄あり、拾得届出者に莫大謝礼、姓名在社三二六番

つまり両方とも赤革トランクを返してくれと訴えているものだった。

前日トランクの運転手は、空トランクを店のガレージの前に停め、車体の点検を行ったとき、ふしぎなことに、後の荷置き場の隅に赤革トランクが逆さになって置かれてあるのを発見した。彼はそれを下へ下ろし、開いても見たが全然見覚えのないものだった。

そのうちに朋輩の誰彼がそのまわりに集つて来た。そしてこのようなすてきな鞆を何処で手に入れたのかと知りたがった。

かの運転手は早速返事をして途中まで喋つたが、そこであとの言葉を嘸みこんだ。そして俄に彼は一つの創作をひねりだしてそれを以て返事に継ぎ足そうとしたとき、支配人の酒田が割込んで来て、その鞆を欲しがった。結局、運転手はその鞆を百円札五枚で支配人に譲り渡した。売った方も買った方もここにこしていた。

酒田はその鞆を手にはら下げて、そこから程遠からぬところにある彼の邸へ歩いて帰つ

た。彼は目下やもめ暮しであった。家族たちはまだ疎開先に釘づけのままだった。東京のこの家には、家政婦の老婆が一人仕えているだけだった。

酒田はその鞆を持つて帰ると、押入を開いて、下の段の奥へ押込んだ。そしてすぐ襖を閉めた。どういうわけでそうしたのか明瞭でないが、多分あまり安く値切つて買ったのが気になつていたのかもしれない。

夕食後、彼は居間に引籠つた。例の鞆を押入から出して、絨氈の上に置いて開いた。それから彼は箆笥の引出をあけて中からなまめかしい婦人の衣類を取出し、それを一々電灯の灯の近くへ持つていつて眺め、指先で布地を摘み且つ匂いを嗅いだ。そして二種類に別けて積んでいったが、その一方を例の鞆の中へはいねいに入れ始めた。長襦袢もあるし、錦紗もあるし、お召もあり、丸帯もあり、まるで花嫁御寮の旅行鞆みたいであった。その上にも彼は、隅の金庫を開いて中から取出した貴金属細工のついた帯留や指環の箱、宝石入りのブローチの箱、腕環の箱などをその鞆の中、ほどよきところへ押込んだ。最後に特別になまめかしい鹿の子緋ぢりめんの長襦袢を上へのせ、それから鞆の蓋をしめたのであるが、ぎゆうぎゆうに詰まっているので蓋は外に向つて太鼓腹のように膨らんだ。そのあとで彼、酒田は意外なことを発見して強く舌打をした。

「ちよツ。この靴には、鍵が二箇所もぶら下っているのに、かんじん肝腎のじょうまえ錠前がついていないじゃないか。見かけによらず、とんだインチキものだ。ええツ、腹が立つ！」

鍵はあれども鍵穴がない。これでは仕様しやうがない。折角せつかくトランクに詰めて、明日は横浜へ売りに行こうという寸法だったが、鍵のわからないトランクでは、あっちへ持つていたり、こっちへ預けたりしているうちにあぶないことになりそうだ。だが、折角せつかくぎつしり詰めこんだものを、他のトランクに移すのは面倒めんとうだ、今夜はこのままにして、後は明日のことにしようと、闇屋やみやの旦那はこのところ聊か過勞ていの体にて、寝椅子の上へ身体をのせた。

「旦那さま。もうこの戸とじま締りをいたしてよろしゅうございませうか」

婆やの声である。

酒田が、締しめておくれというと、婆やさんは硝子戸ガラスをあけて、長い廊下ほうぎを箒でさらさらと掃はき出し、それから戸袋のところへ行つて板戸を一枚一枚繰り出し始めたのである。そのとき勝手の方で電話のベルが鳴り出した。婆やさんはそれに気づいて勝手の方へか駆けこんで行く。やがて婆やさんが再び駆け出して来て、酒田へ電話を取りつぐ。そこで酒田は寝椅子ねいすからむっくり起上つて、婆やと共に勝手の方へ行く。電話機は勝手の方の隅にあり

つて、そこは暗いので、婆やさんは電灯を急いで吊りかえなければならなかった。

こうして僅か十分足らずの時間、お座敷の方を空虚くうきよにして置いただけで、電話が終ると酒田と婆やさんとは再びお座敷の方へ戻つて来て、婆やさんは兩戸あまどの残りを戸袋から繰り出すし、酒田はラジオをちよつとひねつて、そして男女合唱がとび出して来ると、すぐスイッチをひねつて消し、それから煙草をつけて安楽椅子へ腰を下ろしたんだが、忽ちたちま彼はバネ仕掛の人形のようにとびあがった。

「あれッ、ここに置いてあつたトランクが見えないぞ。……トランク、どこへ持つて行つた？」

それからの騒ぎを一々克明にここに写している違いとまはない。とにかくかのトランクは煙のように消えてしまったのである。庭の植込みに隠れていたかもしれない泥坊どろぼうの詮議せんぎや、一応は疑われた婆やさんのこと、酒田の物忘れについての疑惑ぎわくなど、いろいろのことが入りくんでややこしくなつたのであるが、誰しもまさかトランクが悠々と絨氈の上から腰をあげ、明け放しの硝子戸の間から、朧月夜わぼろづきよの戸外へと彷徨さまよい出たものとは思わず、その事実を推理し得た者はなかつたのである。

それからそのトランクはどういう出来事にぶつかったか。

外濠そとぼりの堤つとみの松の下の暗闇くらやみを連れだつて行く若い女と男とがあつた。女は男に対して強硬な態度をとつて、男を引放してずんずん足を早めていた。その女はやがて——そのままで推移せば男のために締め殺されて、枯草の上に身を横たえなければならぬのであつたが、運命のくすしき足取は、女の生命を危局の寸前に救つた。それは今や鼠ねずみに向つて躍りかかろうとする猫の如きその男の腰に、どすんと突き当つた赤革のトランク一箇——女は生命を捨てずに済んだ。男は荒療治あつりようじを執行するに及ばなかつた。男も女も、一応妖異よういに対する恐怖心を起しかつたが、それは慾心によつて簡単に撃退された。開いた靴の中のすごい内容物はあらゆる問題を解決した。女は急に男に対してやさしくなり、そしてその靴を二人で守つて男のアパートへ入り、同棲生活どうせいの第一夜を絢爛けんらんと踏み出すことに両人の意見は完全なる一致をみたのであるが、この詳細もここにくだくたくたく描写してゐる違いとまはない。

それよりは問題はトランクの運命にある。そのトランクは翌朝両人が目ざめてみると、たしかにそこに置いた筈の夜具の裾すそのところには見当らず、両人は目を皿にして部屋中を匂はい廻つたがどこにもなく、そこで両人互いに相手を邪推じゃすいして立廻りへと移行したが、両人が相手の顔を捻ねじて天井へ向けたときに、そこにびったり吸いついてゐる前夜のトラ

ンクを両人が同時に発見した。そこで両人は再び協力し、誰がトランクを天井の棧さんに釘をうってそれへ引掛けたかを怪しみながら、机に椅子を積み重ね、箒や蝙蝠傘こうもりがさやノックバツトまで持ちだしてそのトランクを下ろそうと試みた。そのうちにどうした拍子ひょうしかトランクの蓋が開いて、その中身が五彩ごさいの滝となって下に落ちて来た。両人がそれにとびついて、かき集めている間に、トランクは明いた窓から黙って外へ飛び出していった。

トランクの後を追って書きつけていると際限さいげんがないので、しばらくトランクから離れた話をしようと思う。

帆村探偵登場

冬日の暖くさしこんだ硝子窓ガラスの下に、田鍋捜査課長の机たなべがあつた。課長と相對しているのは、長髪のとっぺんから地肌じはだがすこし覗いている中年の長身の紳士だった。無髭無髯むしむぜんの顔に、細い黒縁くろぶちの眼鏡めがねをかけ、唇が横に長いのを特徴の、有名なる私立探偵帆村莊六ほむらそうろく

だった。一頃から思えば、この探偵も深刻にふけて見える。

「猫の子が宙を飛べるものなら、鞆が宙を飛んだって、仔猫の場合以上にふしぎだとはいえないわけですね」

「いや帆村君、それは違うだろう。猫の子が宙を飛ぶのは許さるべきとしても、生せいなき鞆が宙を飛ぶのは怪談だよ。その怪談に怯おびやかされてわが五百万の都民は枕を高うして睡ねむれないと山積する投書だ。あれあの籠かごを見たまえ」と課長は、二つ三つ向こうの部下の机上を指す。それは尤もつともな風景を見せていた。

「怪談ということでは、この事件の解決はちよつとむずかしいですよ。物理学で行くなら、仔猫も鞆も同じ格です。そしてそらに飛ぶ場合も考えられないことはない。課長さん、そのことについて赤見沢博士の助手の何とかいう婦人に糾ただしてみましたか」

「だめだ、あの小山すみれは。ああいう女は、一旦依怙えこじ地となったら、殺されても喋しゃべらないものだ。赤見沢はさすがにそれを心得て雇っている。沈黙女史は今のところそつとして置くしかない。しかし——帆村君。生もない鞆がなぜ飛び得ると考えるのか、怪談以外の考え方に於て……。ねえ君、林檎りんごも落ちるよ、星も落ちる、猿も木から落ちる」

「万有引力が正常普通に作用するかぎり、それはその通りです。猫の子が宙を飛び、鞆が

空を走るためには、それらの物体に万有引力と反対の方向に作用する相当の力が働いていると断定して間違いないわけでしょう。課長さん、これに答えて下さい」

「さあ、わしには分らんね、全く……」

「万一に考えられることは、特別の浮力です。物体が空気の中にあるために、自分が排除する容積だけの空気の重量に等しい浮力が、万有引力と反対方向に働いているのです。が、こんなことは断るまでもない常識事です。そしてその浮力が仔猫の場合に於ても、靴の場合に於ても万有引力に比して殆んど省略し得る程度の微小なる力です。これはこれで片づいたとして第二に考えられることは……」

「頭の痛くならんように喋ることはできないものかね」

「ご尤もです。……それでそれは——第二に考えられることは、万有引力常数を変えてしまふこと。第三には第三の物体を誘致し来つて、それによる引力を、万有引力以上に効き目を持たせること。それから第四に、アインシュタインの設定した万有引力テンソルを……」

「待った。もうたくさん」

「第四は、今の場合論じなくてもすみませうから、横へどけて」

「みんな横へどけて、怪談へ戻ろうじゃないか」

「とんでもない。要するに、第二又は第三の素因そいんによって、仔猫が宙を飛び、鞆が空を走るものと推定し得られないことはない。赤見沢博士のユニークな頭脳はそれを装置化することに成功したのではないか。仔猫が飛び鞆が走るは、その装置化の成功を語っているのではないか。しからばもはや鞆が深夜しんやの焼跡やけどをうろつこうと、真昼のビル街かすを掠めようと問題ではない。そうでしょうが……」

「いや、おかしいよ。鞆は必ずしも空中を泳いでばかりはいない。神妙に下に落着いていることもある」

「そんなことは仕掛くわいの工合くわいでどうにでもなりますよ。たとえば、鞆の把柄ていへいを手に持って鞆を下げているときには、スイッチが外はずれるようになっていて異変いへんは起らない。しかし把柄が握にぎられていないときはスイッチが入いって、鞆は例の素因そいんにより万有引力まきに勝まさって浮きあがる——つまり鞆とその中身との重さが一枚の羽毛ほどの重さに変わってしまう。そういうわけでしょうな」

「実際に出来るのかね、そんな仕掛しかけが……」

「発明が出来れば、あとは仕掛しかけを作ることなんか極きわめて容易よういですよ」

「ふうん、そんな鞆がどんどん現れて管下かんがいちえん一円おびやかを脅すことになれば、わし達は鞆狩りに手一杯となり、他の仕事が出来なくなるだろう。とにかく怪談にせよ引力にせよ、一大事件だ。早いところその核かくしん心てきしゆつを摘出して、犯人を検挙せにやいかん」

「犯人というほどのものじゃないでしょうに。それに赤見沢博士は今も人事不省じんじふせいを続けていて、何一つ出来ない」

「わしは赤見沢が真実不能者かどうか、嚴重に監視をしている。序ついでに、あの女も小使夫婦も見張っている。赤見沢たちの犯行は、例の白井という若僧や前知事の目賀野が出て来れば分ると思うんだが、どういうわけか彼等は姿を見せん。それはなぜだろうか、どうも分らない」

「その白井氏や目賀野氏の行方こそ、即そっきゆう急に突きとめなければならぬですね。それから、鞆は一日も早く取り押えなければならぬ。それと例の仔猫です。あの仔猫はどうなったか、あれはぜひ突き留めなければならぬですね」

「はあ、仔猫か。あんなものは大したことはあるまい」

「いや、そうじゃないですよ。あれこそ最も重視すべきものだ」

「もうそろそろ本格的に化け猫ばになる頃だという意味かね」

「あの助手女史が保管していませんでしょうか」

「あつ、そうか。よし、白状させてみる。不都合な奴だ」

名探偵ノート

その夜、田鍋課長と部下二名は、帆村莊六を交^{まし}えて、ひそかに赤見沢博士の研究所を指^さして出発した。このことは絶対に秘密裡^{ひみつり}に行われた。捜査課長ともあろうものが、私立探偵の手を借りたなどという風^{ふうひよう}評^{ひやう}がたつては、田鍋警視は甚^{はなは}だ困るのであつた。

もつとも課長は、今夜の行動を、役所の用事とはしないで、お化け鞆と猫^{ねこまた}又^{また}に興味を持つ帆村莊六を援助するための特別行動である——と、彼の部下二名に説明してあつた。

帆村は、お化け鞆については、前章に述べたような見解を持^していた。しかし彼は、この鞆の素^{すしやう}性^{せい}についてまだ突き留めていないことは、田鍋課長の場合と同じだった。

だが彼が、この事件に異常な興味を持つて、解決に一生懸命の努力を払っていることは

誰の目にも明白であり、従つてそのお化け靴についての考察については、誰よりも深いものがあり、そのことを田鍋課長もはつきり認めていたればこそ、こうして帆村莊六のうしろについて行く気にもなつたのである。正直な話が、課長としては、このお化け靴事件ぐらいやりにくい事件は、本庁に奉職以来に一度も先例のないものだった。

今夜の行動は、帆村の示唆しさするところに従つて、田鍋課長が蹶起けつきしたという形になつていたが、実のところ課長としては何等自信のあることではなかつた。行きあたりばつたり何か掴つかめるかもしれない、とにかく助手の小山すみれを絞しぼつてみれば何か出て来やしないか——ぐらいの予想しか持つていなかった。

これに対して帆村莊六の方は、ずっと確たしかな筋として、今夜の行動を割り出しているのだった。すなわち帆村の考察によれば、まず第一に、お化け靴の誕生は赤見沢博士の研究所に違ちがいがないから、どうしてもそこをもつと詳しく調べる必要がある。誠まことに彼はその研究所へ一度も足を踏み入れたことがないのであるから、今夜はぜひ入つて調べてみたい。

第二に、あのお化け靴の製作を注文したのは元知事の目賀野であることは、白井の話から想像がつくが、目賀野は一体その靴をどんな目的に使用するつもりであつたか、そのことは注文主として当然赤見沢博士に語つたことであらうし、従つてその製作の助手をつと

めた小山すみれ女史にも全部又は一部が通じられている筈である。一体その目的は何であるか。それが分ればこの事件の解決はずっと早くなる。また、それが分れば、或いはこの事件は更に重大なる特性を曝露して前代未聞の大事事件に発展するのではなからうか。これは永年探偵等をつとめて来た帆村の第六感であった。

それから第三に、お化け鞆と、赤見沢博士が電車の中で後生大事に抱えていた鞆——その中には杉の角材四本などが入っていた方の鞆——この両者の関係が、まだはつきりしないのであるが、これもなかなか重大問題だと思ふ。なぜなればこの問題には、赤見沢博士の遭難事件が関係している。つまり赤見沢博士が怪漢のために襲撃されたのは、お化け鞆を持つていたことによるらしく思われる節がある。博士はお化け鞆を怪漢のために奪われたのではあるまいか。そしてその代りとして、只の鞆が博士の昏睡体の横に置かれてあり、共に目白署に収容されたのではないか。

帆村は、この二つの鞆を区別して考えていた。係官の中には、両者を同一の鞆とし、それが時には普通の鞆であり、また時には化けるのだと考えているようであったが、帆村はこの二つが別物だとしていた。それを区別するのに最もはつきりしている点は、赤見沢博士の昏倒している傍にあつた鞆には、ちゃんと鍵がかかるようになっていたのに対し、

かのお化け鞆を手にしたことのある人々の話によると、そのお化け鞆には鍵がかからない、つまり錠前がついていない。それともう一つは、お化け鞆には特別に立派な把柄がついているとのことであった。

もし出来るなら、この二つの鞆を並べてみればよく分るのであるが、今はそんなことが出来ない。お化け鞆は相変らず神出鬼没だし、目賀野たちが出頭して引取っていった只の鞆の方は、目賀野たちと共に目下行方不明とある。

もう一つ、帆村が特に重大視じゅうだいししていることがあった。それは案外誰も大して気にかけていないことであつたが、例の「赤革トランク紛失」の新聞広告のことであつた。

あの三行広告は、同じ日の同じ新聞の広告欄に、同じような文句でもって、二つの広告が並んでいた。「拾得届出者に莫大謝礼」と書いてある。「姓名在社三二五番」と、もう一つは「拾得届出者に莫大謝礼」と書いてある。「姓名在社三二六番」との二つだった。

一体これは何者が出した広告なのであろうか。帆村が調べたところでは、前者は「葛かつし飾区新宿二丁目三八番地松山」が出したものであり、後者は「板橋区上板橋五丁目六二九番地杉田」が出したものであつた。それらの番地を当ててみたところ松山という家も杉田という家もちやんとあつたけれど、その当人はこの広告主ではなく、本当の広告主は別

にあった。それに頼まれて名前を貸しただけのことで、その当時毎日何回か、連絡の人が尋ねて来たそうだが、もうこの頃は来なくなつたそうである。そして連絡に来た者は、松山の場合には、長屋のお内儀さんかみ風の女であつたそうだし、杉田の場合は、目の光の鋭い、そしていやに丁重ていちょうな口のきき方をする商人体の者だつたという。そこまでは分つてゐるが、その先のところは帆村にも調べがつかつてゐない有様ありさまだ。

一体何者だろう、この二人の広告主は？

このことについては、帆村は田鍋捜査課長にも報告して、その注意を喚起かんきした。課長は帆村ほどこの問題を重大視はしていない。そしてこの二人の広告主の一人は、博士を昏こんと倒せしめ、お化け靴を奪つた姓名未詳の兇賊きょうぞくであり、もう一人は例の目賀野であらうと考へてゐた。

だが帆村は、田鍋課長と考へを異ことにしてゐた。

広告主の一人は目賀野だと課長は推定してゐる。しかし帆村は、そうでないと思つてゐた。なぜならば、目賀野ならば一度もそのお化け靴を手にとつて見たことがないから「特別美且大なる把柄あり」などというその靴の特徴を知つてゐる筈はずがない。だから目賀野ではないと思はれる。

しからば二人の広告主は何者か。

酒田であろうか、外濠そとぼりの松並木の下を歩いていた男であろうか。いやいや、そのどつちでもない。新聞広告の出たのは、彼らがお化け鞆に始めてめぐり合ったどりもずつと以前のことになる。

トラックをトラックに受取つて走つたそのトラックの運転手でもないことは、彼が酒田と満足すべき取引をしたことを考えれば、すぐに分る。では、新宿の露店ろてんで、この鞆を店に並べて売つていた店員であろうか。いや、彼でもなさそうである。なぜならば三行広告代金と鞆の値段とは殆んど同じであるので、広告を出したとて大抵たいてい戻つて来ないことが分つているのに広告をする筈がないと思われる。

すると、広告主はもつと以前から、このお化け鞆に関係していた人物に違いない。この十五坪住宅の主人が夜廁かわやの窓から何気なげなく外を見たところ、トラックが月の光に照らされて、ひとりで道を歩いていたという東都怪異譚とうとかいいたんの始まり——あの頃更さらに以前の關係者に相違ない。

一体、誰と誰であろう。

一人は、田鍋課長の指摘ししてきしたとおり、多分お化け鞆を博士から奪つた兇賊であろうと思

われる。しかしこのことも、博士が意識を恢復かいふくして、遭難談を詳しく述べてくれる日までお預けとしなければなるまい。今一人の人物については、全く五里霧中ごりむちゆうである。

が、この二人の正体を突き留めとさえすれば、この事件の解決は一層早くなるものと、帆村は確信し、いま推理を懸命に働かせている最中なのであった。

なにさま、帆村探偵の考え方は、田鍋課長のそれとは大分違っている。

深夜の研究室

闇やみに紛まぎれて、四名は赤見沢研究所の建物の壁際かべぎわにぴったり取付いた。

時刻は午後十一時であった。

研究所のすべての窓は真暗まつくらであった。みんな寝てしまったであろうかと始めは思ったけれど、窓の一つからすこし灯ひが洩もれているので、一同はそれを目当てめあにしてその窓下へ身をひそめたわけである。

ジイイイ……と、妙な音が、室内にしている。

中を覗^{のぞ}こうとしたが、窓が高い。

そこで田鍋の部下二名が台の代りになり、帆村と課長を肩車に乗せた。この珍^{ちんみょう}妙な形でもって、透間^{すきま}を通して窓の中を覗いた。

カーテンの隙間から、室内の模様をうかがうことが出来た。

「おやア……」

「あッ」

帆村も田鍋課長も、思わず愕^{おどろ}きの声を発して、あわててあとの声をのみこんだ。

室内には、まことにふしぎな光景が展開していた。

その部屋は、赤見沢博士の研究室の一つで、多数の器具機械がごたごたと並んでいた。そしてそこに三人の人物が居た。

そのうちの一人は、助手の小山すみれ女史であつて、彼女がそこに居ることには格別^{かくべつ}愕きはしない。

もう一人は、若い男であつた。かなり背の高い、立派な顔立の青年であつて、にこやかな笑いをたたえて、小山すみれの方を見つめている。

この男の顔を見て愕いたのは帆村莊六ではなく、田鍋課長であった。

(はてな。この女たらしの男は、どこかで見たことがあるぞ)

たしかに課長の記憶の中にある男であった。しかしどこで見た男だったか、すぐにはそれを思出すことが出来なくて、課長はいらいらして来た。帆村はこの青年の顔に、何の記憶も持っていないかった。ただ、小山すみれ嬢とはおよそ反対の立派な男子で、皮肉な対^{たいし}照^{しょう}をなしていると感じたことであつた。が、しかし、彼はあまりながくこの美貌^{びぼう}の青年に見惚^{みと}れていることが出来なかつた。というのは、残るもう一人の人物が、彼の注意力の殆んど全部を吸取つてしまつたからである。そのことは、田鍋課長にとつても亦^{また}同様であつた。

(あれは赤見沢博士に相違ないが、一体どういうわけで博士はここにいるんだらうか)と帆村は不審^{ふしん}の目をぱちくり。課長の方は(誰が赤見沢博士を病院から出したんだらうか、わが輩^{わがはい}の許可を得もしないで……。何奴^{どいつ}が出したか、怪^けしからん奴^{やつ}どもだ)

と、かんかんになつて、頭から汗が出て来た。

その赤見沢博士は、肘懸椅子^{ひしかけいす}に凭^{もた}れ、頭を後の壁につけていたが、その恰好がへんにぎこちなかつた。博士はまだ意識混沌^{こんとん}としてるので、あのような恰好をしているのであ

ろうが、両眼を大きく明けているのが、ちと腑ふに落ちかねる。

そのときであった。小山すみれが脚きやたつ立から下りて、二本の綱を引張つて、赤見沢博士の傍へ来た。その綱は、天井から垂たれていた。よく見ると、天井には滑かつしや車がとりつけてあり、綱はそれに掛つていて、上下自在になつてゐることが分つた。

小山女史は、その綱の一本を、いきなり赤見沢博士の頸くびにぐるぐるつと巻きつけた。顔色一つ変えないで……。美貌びぼうの男は、あいかわらずにこにこ笑つてゐる。小山嬢は綱に結び目をつくると二三歩うしろへ身を引いて、もう一方の綱をぐんぐんと下にたぐつた。すると博士の頸からに搦からみついてゐる綱がぴーンと張つた。それでも小山嬢は、自分の手にある綱をぐんぐんと下にたぐつた。博士の身体が椅子から浮きあがつた。小山嬢が綱をたぐらばに、博士の身体は上へ吊りあげられた。博士の絞首刑こうしゆけいである。それを自らの手によつて行つてゐる小山すみれの顔は、始めと同じく無表情で、悔恨かいこんの色もなければ憎悪ぞうおの気も見えない。

とうとう赤見沢博士は、背広姿のまま、室内にぶら下つた。博士の足が、実験台よりもすこし高くなつたところで、小山嬢は、手にしていた綱つなを壁際の鉄格子てつこうしにしつかりと結びつけた。そして首吊り博士の下までやつて来て、美貌の男の方へ何とかいって、博士の

足を指した。

田鍋課長は先刻から愕おどろきの連続で、息が詰まる想おもいだった。かねて怪しいと睨にらんでいた小山すみれが、博士の首に綱をかけてくびり殺すところをまざまざと見せられ、全身の血は逆流した。現行犯にしても、これほど鮮かに恐ろしい現行犯を見たことは、今までにな
いことだった。彼は、自分が部下の肩車に乗っていることを忘れて、窓を叩き割ろうとし
て、帆村に停とめられた。

「ちよつと、静かに……」

帆村は、室内を指した。

小山嬢は博士のズボンを手にとつて、ズボンの裾すそを持ち上げた。

奇怪なことに、そのズボンには脚あしが入っていないかった。つまりズボンだけであつた。

小山嬢は、実験台の下に跣しゃがむと、間もなく台の上に大きな靴を持出した。彼女はそれ
から靴をまた台の上へ置いた。博士にその靴をはかせるつもりらしいが、ズボンだけで足
のない博士が、どうしてそんな重い靴をはくことが出来るだろうか、田鍋課長は気がか
りであつた。

小山嬢は、その靴を指して、美貌の青年の顔を見上げた。青年は肯いた。うなず小山嬢は靴の中をあけて見せた。中には何やら詰まっていた。それは何かの小型の器械であるらしく、小さい部分品が組合わせられていた。そんなものが入っているのは、靴の中に足を突込むことが出来ないではないかと、田鍋課長は更に気がかりになった。

小山嬢の指は敏捷びんしょうに動いて、その部分品を一々指した。彼女はそれについて説明しているらしいが言葉はさっぱり分らない。しかし帆村は、その小型器械が、無電装置であることに気がついた。

小山嬢は、もう一つの靴の中からも、別の器械を取出した。その器械は、著しい特徴があるので、帆村にはすぐ分った。それは放射能物質ほうしゃのうから出る放射線を捕えて、その放射線の強さを検出する計数管けいすうかんの装置であった。

（無電装置と放射線計数管と——妙なのが靴の中に収しまつてある？）と、帆村は首をひねった。田鍋課長には、そんなことは分らないので、どうしてあんなものを靴の中に入れてあるのか、あれでは足が入るまいなどと、そんなことばかりを心配していた。

小山嬢は、靴を手にぶら下げた。そして指をしきりに動かして、計数管と無電装置との間に連絡のあることを示したのち、靴をいじっていたが、靴のフックのところ突然赤い

豆電球がついた。

すると、殆んど同時に、靴の底から熊手のようなものがとび出して、下に向って開いた。その恰好は、がんじきをつけた雪靴にどこか似ていた。その熊手様のものは、蟹のように爪をひろげ、びくびく慄えていたが、そのうちにその爪がだんだん内側へ曲つて来て、遂には靴の下で何物かをがちりと抱きしめたような恰好となった。

小山嬢は、そうなった靴をしきりにさしあげて、美貌の青年の注意を喚起している風に見えた。すると青年は感激の面持で、つと小山嬢の方に寄ると、靴もろとも両手でぐつと抱きしめた。青年の腕の下にある小山嬢の顔が、急に蒼くなり、それからこんどは赤くなった。彼女のしっかり閉じられた瞼の下に大きな眼玉がごろんと動くのが見えた。彼女は恍惚境に入っているらしい。

青年が腕を解いて小山嬢を離すと、彼女は靴を持ったまま傍の椅子の上へ、へたへたと崩れるように腰をおとし、しばらくは動こうともせず、口もきかなかつた。

(無電装置と放射線計数管と浚渫機とを備えている靴——とは、妙な靴があったものだ。一体この三題、さんだいばなし 晰しみたいなものをどう解くべきであろうか)

帆村は、小山嬢がまだ持続する恍惚境から醒めやらぬのを見やりながら、心のなかにメ

毛をとった。

そのうちに小山嬢は、やっと正気に戻ったと見え、靴を抱えて椅子から立上った。

彼女はその靴の紐を、博士のズボンの下端にまきつけて縛った。ズボンが靴をはいたように見える。

それがすむと、小山嬢は、飾椅子に結びつけてあつた綱をほどき、宙に首吊りを演じている博士の身体を下におろし、前のとおり肘懸椅子に腰を掛けさせた。博士の死体は、綱を首にまきつけたまま、目をかつと剥いて、天井を見詰めている。

小山嬢は、美貌の青年に向つて手真似と共に何事かを命じた。すると青年は、くるつと後を向いた。青年の顔は、今や窓外から室内を窺う帆村と田鍋課長の方へ正面を切った。

(あつ、そうだ、思い出したぞ。あの若僧とは、この前、R大学研究所で会つたことがある。二百グラムのラジウムの盗難事件が起つたあの研究所だ。たしかあの若僧は、そのラジウム保管室の向い側の何とか研究室の助手で、彼は事件当時、怪しい女性とその保管室からあわてくさつて出て行くのを見たと言言したんだ。なんという名前だつたかな。ええと、万沢といったかな。……)

田鍋課長は、えらいことを思い出した。彼の胸の中は、今や沸々と沸騰を始めた。

しかし帆村はそんなことを知らない。

美しき 闖入者
ちんにゆうしや

田鍋課長の知つていることを帆村は知らず、帆村の知つていることで田鍋課長の知らぬことがあり、兩人肩を並べて窓の中を覗き込んでみるところは奇観きかんだった。

後を向いて、ごそごそやっていた小山嬢こねこが、くるりとこつちへ向き直つたと思うと、彼女の手に一足の仔猫こねこがあつた。それをきつかけに美貌の青年も、廻れ右をして、仔猫を見ることを許された。

小山嬢は、頬ほおのあたりいきいきとして血の色を見せながら、その仔猫を抱いて、博士の首吊り死体の傍そばへ寄つた。そして博士の服の胸を開くと、その中へ仔猫を入れて、しばらくなくなにかごそごそやっていた。そのうちにそれが終つたと見え、彼女は博士の胸ポタンの釦ボタンをかけて身を引いた。

するとふしぎなことが起つた。博士の死体が椅子からふらふらと立上ると見るや、なおそれはふわふわ上へ上つて行く。博士の首にからみついてゐる綱がだらりと下へ下る始末。そのうちに博士の死体は、頭を天井にこつんとぶつけ、天井に吸いついたようになってしまった。両脚——いや両のズボンに重い靴をくつつけたのが、ぶらんぶらんと振り運動をつづけている。

帆村は、たまりかねたように、課長の首へ手をかけて引き寄せた。

「あつ、苦しい。一度下りて下さい」

「こつちもそう願いたい」

叫んだのは帆村ではなく、帆村と課長を肩車に載せてゐる二人の部下だった。それには構かまわず、帆村は課長の耳みみに囁ささやいた。

「今見たでしょうね、あの仔猫を……。仔猫を博士の人形の中に入れると、あのとおり博士の人形はふわふわと空中に浮きあがつて天井に頭をつかえてしまった」

「ええッ、あれは人形か。人形だったのか」

課長は啞然あぜんとして、目を天井へやる。

「田鍋さん。あの女はやっぱり猫ねこ又またを隠していたんですよ。そして博士の人形を作った

り、その他へんな装置をつけたりして、一体何をするのか、このへんで中へ踏込んだら、どうです」

「うん。しかし、もうすこし見ていよう」

「課長。一度下りて下さい、肩の骨が折れそうだから」

「これ大きな声を出すな。家の中へ聞えるじゃないか」

上と下との掛け合いが、だんだん尖鋭化して来た折しも、思いがけないことが、室内に於て起った。

というのは、突然に——全く突然に、どこからとび出したのか、一人の若い女人が、部屋の隅に現われた。彼女の手にはピストルが握られていた。ピストルは小山すみれと美貌の青年とに交互に向けられている。

美貌の青年が両手をあげた。小山嬢もそのあとから、しなびた両手をあげた。小山嬢は額に青筋をたてて憤慨の面持で突然闖入したる背の高い美女を睨みつけている。美貌の青年は、にやりと笑っている。

美女は、しずかに歩を運んで、博士の人形を結えている綱に、空いている方の手をかけた。彼女はその綱をひいて、博士の人形を室外に持出す様子を示した。

そのとき、美女はわずかの隙を作った。

と、実験台の下の腰掛が、風を剪つて美女の胸のあたりを襲った。が、それは美女が咄嗟に身をかわしたので、うしろの扉にあたつて、扉を開いただけに終つた。

ズドン。

銃声が轟く。硝子の壊れる音。悲鳴。途端に又もや腰掛がぶうんと呻りを生じて美女の顔を目懸けて飛ぶ。これは美貌の男の防禦手段だつた。——が、このときどこからともなく煙がふきだしたと思つたら、カーテンが一瞬に焰と化した。めらめらばちばちと、すごい火勢に、研究室はたちまち火焰地獄となり、煙のなかに逃げまどう人の形があつたが、その後のことは、帆村も田鍋課長も見極めることが出来なかつた。突然窓から吹きだした紅蓮の炎に、肩車担当の二警官はびつくり仰天、へたへたとその場に尻餅をついたからである。帆村と課長は、弾みをくらつて大きく投げだされ、腰骨をいやというほど打つて、しばらくは起上ることが出来なかつた。

そのうち火勢はずんずん拡がつて、赤見沢博士のラボラトリーはすっかり火に包まれてしまい、手のつけようもなくなつたが、それは研究室内にあつた油と薬品が、このように火勢を急に強めたものに違いなかつた。

課長が帆村たちと共に再び立上り、燃える建物をいくたびもぐるぐる廻って警戒につとめると共に、機会があれば、中へとびこんで何か目ぼしい品物を取り出そうとあせったけれど、遂に研究室の方には入ることが出来なかった。そしてかの美貌の男か、美女か、小山すみれかに行逢えば、直ちに補えるつもりでいたけれど、結局この重要な三人の人物を空しく逸してしまった。

駆けつけた消防隊の手で、完全に火が消されると、間もなく暁が来た。

課長は、焼跡を丹念に調べた。

その結果、一箇の無残な焼死体が発見せられた。背骨からしてすぐ判定がついて、犠牲者は気の毒な研究生小山すみれであることが分った。しかし美貌の男も美女も、現場に骨を残していなかった。

また仔猫の骨もなかった。帆村がさつき異常なる興味を覚えた妙な器具の入っている靴も、焼跡の灰の中には見当らなかつた。

この博士邸の火が消えた後で、田鍋課長と帆村莊六とは、焼跡に立って、意見の交換をした。互いに知っている事実を語り合った結果、

「田鍋さん。これは面白くなりましたよ。化け靴事件と、ラジウム盗難事件との間に密接

な関係があるということが分つて来たじやありませんか」

と、帆村がいえば、田鍋課長は、

「どうもそういうことらしいね。しかしラジウムとお化け靴と、どういつつながりになっているか見当がつかんが、君は何か思いあたることがあるかね」

「そのことだが、僕の考えでは、あの盗難とうなんに遭つたラジウムは、今どこか知らんが、兎とに角かくちよつと手の届かない場所にあるんだと思うんですね。それでさ、あの万沢まんざわとかいう男が小山すみれ嬢せうを唆そそかして、仔猫利用の吊上げ装置つりあを作らせたんだと解かい釈しゃくする」

「どうしてそうなるのかね」

「博士の人形も焼けちまい、すみれさんも焼け死んだので、はつきりしたことは分らないけれど、あの博士の人形は猫又の浮力——というか重力消去装置の力というか、それを利用して浮き上る力を持たせてある。靴に仕掛けた放射線計数管は、ラジウムの在所ありかを探すための装置だ。無電の機械は、計数管に現われる放射線の強さを放送する。それからもう一つ、あの人形には電波を受けて、靴の下に仕掛けてある浚漑機しゆんせつきみたいな、何でもごつそりさらい込む装置——あの装置を動かせるようになってるんだと思う。つまり電波による操縦そうじゆうで浚漑機を動かすんだ。これだけのものを、あの人形は持っていたと思う」

「そんなものを、どうする気かな」

「そこでだ、悪漢あつかん一味は、あれを持ち出して人形を歩かせ、計数管の力を借りて、ラジウムの在所を確かめる。

人形がちょうどラジウム二百瓦グラムの容器の上に来たとき、放射線の強さは最大となるから、そのとき悪漢一味は電波を出して、あの靴の下に仕掛けた浚渫機を働かせる。つまりごっそりと、ラジウムの容器を、あの浚渫機の爪つめの間にさらえ込むのさ」

「ふうん、なるほど」

「それからこんどは、例の猫又の力を借りて、人形ごとずっと上へ浮き上らせるわけなんだが、僕にも分らないのは、重力消去装置の力を借りる必要のあるラジウムの隠かくし場所とは一体どこなんだか、見当がつかないんだ」

「はてな、一体どこなんだかね。そういうへんな人形の力を借りなければ取出せない場所というところ……」

田鍋課長にも、全く見当がつかなかった。

つばぎ
椿の咲く島

椿の花咲く大島の岡田村の灯台とうだいのわきにある一本の大きな松の木の梢こずえに、赤革のトラ
ンクがひっつかかっていた。

それを発見したのは、早起きをして崖がけつぶちで遊んでいた官舎かんしゃの子供たちだった。そ
れからみんなに知れわたって、騒さわぎは絶頂ぜつちように達した。

「誰たれがあんな高いところまで登のぼって、鞆たもとをくくりつけでいったらう。不審ふしんなことだ」
まことに不審ふしんの至いたりであった。それを探たん究きゆうすべく、灯台の職員で、身の軽い瀬戸さ
んという中年の人と、その配下はいかの平木君という青年とが、身を挺ていしてその松の木をよじ登
って行った。

両人は松の枝にひっつかかっている鞆たもとを、枝から取外とりはずすと、把柄なわに繩なわをしばりつけて、
鞆たもとを下へぶら下げて下ろした。下に集っていた連中はその鞆たもとが下りてくるのを興味ぶかく
見守っていた。その鞆たもとの中から、赤い紐ひもが二本ぶらぶらと垂たれているのが、甚だ奇妙きみょうで
あったのと、その鞆たもとが地面へつくと同時に、あたりが急にへんに臭くさくなったことが特記せ

らるべきだった。

松の木をよじ登った兩人も下りて来て、その鞆が半分は自分たちのもののような顔で鞆のそばへ近づいたが、その臭気しゅうきには顔をしかめずにはいられなかった。

「瀬戸さん。えらいものを下ろして来たな」

「なんじやろうかなあ、この臭いのは……」

「その鞆の中が怪しいなあ。へんなものが入っているんじゃないよ。女の生首なまくびかなんかがよ」

「嚇おどかしつこなしよ」

「鞆から出ている赤い紐ひもな。それは若い女の腰紐こしひもじゃぞ。その腰紐こしひもが、先が裂さけて切れているわ。それにさ、紐ひもの先さきとところが赤黒せきくろく染そまっているが、血ちがこびりついているんじゃないのかい」

書記の青木が、とがった口吻くちふりから、気味のわるい言葉を次々に吐はいた。立合たひあいの衆しゅうは、いいあわせたように二三歩後へ下った。

「よおし、何が入っているか、一つ鞆をあけてくれよう」

「よしなよ、気味が悪い。海へ捨てちまいな」

瀬戸の妻君がいった。

「鞆をあけてから捨てても遅くはないだろう。もし紙幣が百万円も入っていてみな、わしらの大損だよ」

「ははは、慾が深いよ、工長さんは……」

その鞆が簡単にあかなかつた。鞆の金具がどうかしているらしかった。そのうちにも臭気はいよいよよぶんぶんとたまらなく人々の鼻を刺戟したので、立合いの衆は気が短かくなり、とうとう斧を持ち出して、鞆の金具を叩き斬つた。

鞆はぱくりと開いた。みんなはわれ勝ちに中をのぞきこんだ。顔をしかめる者、ぺっぺつと唾を吐く者。中には仔猫の死骸が入っていた。それと赤い紐が一本……。

靴の先と棍棒とで、鞆は崖を越して海へ。

その鞆は、執念深いというのか、海上を漂ううちに海岸へ漂着した。元村の栈橋のすぐそばであつた。

警官が聞きこんで、その鞆を検分に來た。彼は東京からの指令を憶えていたので、早速「それらしきもの漂着す」と無電を打つた。

折返し、新しい指令が來た。警官たちは忙しくなつた。旅館は一軒のこらず臨検をうけた。

その結果、目賀野が見つかつて、飛行機で到着したばかりの田鍋課長の前へ呼び出された。

目賀野は、その鞆と無関係であることを主張した。いわんや殺人事件などは思いもよらないと抗弁した。

三日間、のべつに取調がつづけられ、目賀野が陳述した重要事項は、次のようなことであつた。

「別に悪いことをした覚えはありません。君も知っているとおおり、昔からわしは曲つたこととは大嫌いだ。……しかし、ちよつと慾の気は出した。例のラジウム二百瓦の入つた鉄の箱が、この三原山の噴火口の中に投げこんである耳にしたもんだから、なんとかそれを取出そうと思つてね。いや、取出せばその筋へ届けるつもりだった、本当です。しかし世間を呀つといわせたかつた。そこで思いついたのが、赤見沢博士の研究だ。重力消去の実験に成功していることをわしは知つていたので、博士にそれを使った一種の起重機の製作を依頼したのです。そのトランクは、すなわちその品物だったかもしれない。いや、その種の試作品だったかもしれない。要するにその装置を噴火口の中へ投げ入れておくと、火口底において巧みにラジウムの入つた鉄函を吸いつけ、あとは重力消去によつて噴

火口をのぼり、上へ現われ、わが手に入るといふ計画だった。生の人間じや、とても火口底へは下りられないんでね。……が、その博士がわしのところへ来てくれる約束の日に、途中であの事件に遭^あつて、あんなことになるわ、そばにあったトランクは、早いところ何者かによつて掘^すりかえられていたので、わしはすっかり失敗してしまった。たったこれだけのことです。すこしも怪しい点はない。元村へ来て泊^とつていたのも、別な手段でラジウムを取出す方法を研究に来たわけで、あのトランクには関係がないです。これはよく分つてもらわにや大迷惑^{おおめいわく}だ。……白井はどこへ行つたか知らん。船に乗つていたが、その後脱走したそうで、わしは知らん」

この陳述によつて、あらまし筋は分つて来たようである。
つまるところ、目賀野は本事件の主役ではなく、その傍^{ぼう}系のドンキホーテ染^しみたところのある人物に過ぎないのだ。

「例のラジウム二百瓦が三原山の噴火口に投げこんであることは、いつ誰から訊^きいたか」
課長は、最も重大なところを突^つ込んだ。

「そのことかね。それはあの白井が、いつだったか、密書^{みつしよ}を拾^{ひろ}ったんだ。その密書に簡単ながら、そういう意味のことが書いてあつた。その密書は白井が持っている。わしでは

ない」

「その密書の差出人は誰か。また受取人は誰なのか」

「名前ははつきり書いてなかった。ただ、差出人の名前に相当するところには、矢を二つぶちがえた印が捺してあった」

「矢を二本ぶちがえた印が、ふうん。そして受取人の方には……」

「受取人の名前に相当する場所には、三本足の黒い鳥の絵が書いてあった」

「何という、三本足の黒い鳥の絵が？」

と、課長は驚愕の色を隠しもせず叫んだ。

「どうした課長。鳥の絵になぜそんなに愕くのか。一体それは誰のことなんだ」

目賀野はいい気になって反問した。

「それは恐るべき賊のしるしだ。烏啼天駆という怪賊があるが知っているかね」

「ああ、怪賊烏啼か。烏啼のことなら聞いたことがあるが、若いくせに神出鬼没の悪漢だつてね。一体どんな顔をしているのかな、その烏啼というやつは……」

「それがよく分らない。烏啼と名乗る彼に会った者は誰もない。しかし脅迫状などで、烏啼天駆の名は誰にも知れ互つている」

「捜査課長ともあろう者が、そんなぼやぼやしたこと、御用が勤まると思うのか」
 「何をいう。いい気になって……」

課長は目賀野を元の留置場へ戻した。

怪賊烏啼

そのあとで課長は溜息ばかりついていた。この二つの事件に、怪賊烏啼天駆が関係しているとは、目賀野の話で始めて分った。そうになると、これはますます事が面倒になってくる。ありとあらゆる検察力を発揮しないと、烏啼を引捕えることは出来ない。しかし、一体どこから手をつけていいか、分別がつかない。こういうときに帆村が居てくれれば、どんなに力になつてくれるか分らない。が、彼にはこの事を知らせずに、この大島へ来てしまったことが後悔された。

だが、その帆村が、ひよつくりと課長の前に現われたもんだから、田鍋はおどろき且つ

よろこんだ。彼は早速、この事件に烏啼天驅が関係していることを帆村に語って、帆村の助力をもとめた。

「それはいいことが分ったもんです。いや実は、僕が今日飛行機でここへ飛んで来たのは、本庁からの依頼で、あなたに手紙を持って来たのです。さあ、これを読んで下さい」

と、帆村は内ポケットから手紙を出して、課長に渡した。それは課長の次席にいる主任の芥川警部からのものだ。手紙の内容は、これまた愕きの一つだった。

「えっ、赤見沢博士が昏睡状態から覚めたというか。そして君は博士に会って話をしに来たって？」

「そうなんです。その結果、いろいろと分って来ましたよ。第一に、博士はあの晩、只の鞆の中に、例のお化け鞆——つまり重力消去装置の仕掛けてある立派な把柄のついている鞆を入れて、電車に乗ったんだそうです。決して角材や古新聞紙は入れなかったといいます。つまり賊は、博士の鞆とそっくりの鞆を用意し、その中に角材を入れて、二重鞆と同じ位の重量とし、博士の鞆と掬りかえるつもりだったらしい。博士は言明していません、自分が座席に座っていると、よく似た鞆を持った乗客が近寄って来て、博士の前に立ったそうです」

「そやつが怪しい！」

「そうです。誰が聞いても怪しい奴ですが、そのとき博士は大いに要慎して、自分の持っている鞆を奪われまいとして、一生懸命抱えこんだそうです。すると怪しい乗客の連れである若い女が博士の方へ身体をおつかぶせるようにのしかかって来て、女の膝が博士の膝を強く押した、すると急に博士は気が遠くなってしまうたんだそうです」

「どうしたのだろう」

「女の膝から博士の膝へ、或る麻薬の注射が施されたんでしようね。博士は、そういえばちくりとしたようだといっています。——それから博士は、意識の朦朧たる裡にも、膝の間に挟んでいた鞆が掬りかえられるのに気がついたそうです。しかし声を出そうにも手をあげようにも、どうにもならなかったそうです。そしてそのうちに何もかも分らなくなつた……」

「怪しい奴は、すると男と女と二人組なんだね」

「そうなんです。これが頗る重大な事柄なんですが、田鍋さん、博士はその男女の顔をよく覚えているといって、人相を話してくれましたが、男も女もなかなか目鼻の整った美しい人物だったといえますよ」

「えつ、何という。美男美女だつて？」

「正に美男美女なんです。そしてそれがですよ、ほら博士邸が焼けた晩ね、あの晩に研究室にいて小山すみれを相手にしていた若い美貌の男——万沢とかいいましたね——あの男とそれから後にピストルを持って現われた美人がありましたね、あの女と、この両人らしいのですよ」

「ふーん、そうか」

田鍋課長は、満面を朱盆しゅぼんのように赭あかくして、膝を叩いて呻うなつた。

「ね、課長さん。さつきあなたから伺うかがつた話から誘導ゆうどうすると、その美貌の男こそ、烏啼うてい天駆てんくでなければならぬと思うんですが、課長さんの意見は如何ですか」

帆村は、大胆なことをいった。

「そうかもしれない。いや、それに違いない。あれが烏啼なら、あのとき逃がすんじゃない。で、女は何者か」

「それが分らないのです。しかしですよ、この事件の主軸しゅじくには、二つの者が功を争つてゐることは、僕も察していました。例えばあの紛失鞆の新聞広告のことですね。

あの広告主の一人は烏啼天駆であり、もう一人はやつぱりあの女だったんですよ」

「ふうん、なるほど、そういうえばそうかもしれない」

「あの二人は、時に一緒になって働きました。その例は、博士から鞆うばを奪ったときなんか
がそれです。それでいて、二人は大いに睨にらみ合あっていたんですね。だから博士邸のピスト
ルさわぎも起った。あれはお化け鞆が紛失したのに困った烏啼こが、小山すみれを唆そそのかし
て、猫又を利用した新規の起重装置をこしらえるように頼んだ。それが完成したので、持
つて帰ろうとしたところを、例の女が嗅かぎつけて、暴あばれこんだという訳なんですよう」
「そうだ、それに違ちがいがない。するとわが輩はいも大迂回だいうかいをやっていたわけだ。ちえッ、いま
ましいい」

てんばつ
天罰下る

事件は、そこまでは解とけた。

当局は警戒網けいかいもうを三原山のまわりに嚴重かたに固めめぐらした。

その一方、大学に懇請^{こんせい}して、火口底^{かこうてい}に果してラジウム二百瓦^{グラム}が投げこまれてあるのかどうかを検^{しら}べて貰^{もら}った。これは案外苦もなく分^わった。たしかにラジウムは火口底の南寄りの岩の間にあることが確認された。

しかし、そのラジウムを取出す方法はちよつと簡単には出来そうもないことが分り、当局は未だに警戒の陣をゆるめないで番をしている。なにしろその後、烏啼の消^{しょう}息^{そく}がさつぱり分らないので、油断^{ゆだん}はならないとのことであつた。

帆村はもうラジウム事件には、大した興味を持つていない。しかし田鍋課長が、彼に自慢らしく語^{かた}つたところでは、烏啼はあのR大学の研究所のラジウム保管室の向いの研究室の助手に化^ばけこんでいて、あのラジウムを巧^{たく}みに盗^{ぬす}み出した。それから彼は、かねて連絡をつけてあつた看護婦の秋草^{あきくさ}に渡した。秋草はそれを持って出て、某飛行場^{ぼうぼう}へ急行し、烏啼の一味である矢走という男をして、その品物を飛行機でもって三原山の噴火口に投げおとさせたと認める。例の美男美女というのは、この烏啼と秋草らしいといわれる。研究所の同僚たりし人々は、確かに彼ら二人を、美男美女と認めているから、間違いないと、田鍋課長はいささか得意で、椅子^{いす}の背^せにふん反^ぞりかえつた。

帆村の興味は、そんなことよりも、大島の松の木にひつかかっていたお化け靴と猫又の

死骸と血染の細紐が、何を語っているか、それを解くことに懸っていた。

その年の春、ひどい海底地震が相模湾の沖合に起り、引続いて大海嘯が一带の海岸を襲った。多数の船舶が難破したが、その中の一隻に奇竜丸という二百トンばかりの

船があつて、これは大島の海岸にうちあげられ、大破した。また乗組員の半数が死傷した。

この奇竜丸の救援に赴いた官憲は、はからずも、この船の構造や、乗組員の様子に疑惑を持ち、嚴重に取調べた結果、この船こそ怪賊烏啼天駆の持ち船だと分り、そして天罰とはいえ重傷を負っている烏啼を、遂に他愛なく引捕えた。

このことは早速東京へ無電で連絡され、田鍋課長は再びこの大島へ急行して、烏啼を受取った。

烏啼はもう観念したものと見え、すべてをべらべらと喋った。

彼の行動は、大体帆村の推理したところに一致していた。しかし烏啼がその後秋草と争つて、遂に猫又もお化け鞆も共に自分の手に入れ、それを奇竜丸に持ち込んだばかりか、秋草の自由を束縛してこの船に乗せてしまったことが分つた。それから後はずっと海上生活をしてきたものだから、この二人の行方は陸上を監視していただけでは知れなかつた筈である。

その烏啼は、海上生活を送りながら、なんとかして大島へ上陸し、三原山の火口底から例のラジウムを取出そうと、機会の来るのを狙^{ねら}っていたが、当局の警戒がすこぶる嚴重なため、その目的を達することが出来ないでいた。

ところが或る日、秋草が実に大胆なる脱走を試みた。

彼女は、烏啼の部下数名を、巧^{たく}みなる手段によつて籠^{ろうらく}絡すると、その力を借りて、猫又とお化け鞆とを盗み出させ、それから細^{ほそ}紐^{ひも}で自分の手首をしばつて、猫又を入れたお化け鞆に結びつけ、鞆の把柄を下へ押し下げた。すると猫又の浮^{ふり}力^{よく}と、お化け鞆の浮力とによつて、鞆は秋草の身体を下にぶら下げたまま宙に浮きあがった。船は依然として走っているものだから、鞆にぶら下つた秋草の身体は見る見るうちに船を離れた。

これに気がついた乗組員が、急いで烏啼に知らせたので、烏啼は顔色をかえて船^{せんきよう}橋へ上つた。そして秋草の身体の流れていったと思う方向へ船を戻した。

だが、折^{おり}柄^{から}空に月はあれど夜のことだから、遂^{つい}にそれを発見することが出来なかつたという。

この烏啼の告白によつて、猫又の死骸とお化け鞆と血染めの細紐^{よすな}の謎が漸^{ようや}く解^とけそめた。そのようにして秋草は脱走をはかつたが、彼女はぐんぐん上空へ引き上げられて息^たが絶え

たものと思う。そのうちに彼女の身体を吊下つりさげている紐が切れ、下へ落ちてしまったのであろう。恐おそらくそれは広い海の中であつたことと思われる。彼女の織せん細さいなる手首が紐でこすられて血が出、それが紐の切れ端に残つたことは確かだ。こうして彼女は、遂に敗れて一命いちめいを失つたものらしい。

臼井は今も行方が知れない。

それから最後に特筆とくひつたいしよ大書しておくべきは、田鍋課長が目賀野を証人として、烏啼に会わせたところ、目賀野がびっくりして烏啼を指して叫んだ。

「やツ、貴様は千田じゃないか」

烏啼は、縷ほつたい帯を巻いた頭をすこし起こして、ふふんと笑つた。

「貴様が千田なら、おい話せ、わしの姪めいの草枝はどこへ連つれていった」

千田と草枝が一組となつて、いつも目賀野の下で働いていたことは、ずっと前から知られている。

「おれは知らんよ。課長に願つて、細紐に残っているあの女の血に尋たずねてみたがよからう」と、烏啼はいつて、むこうを向いてしまった。

そんなことから、目賀野の姪の草枝こそ、看護婦秋草のことであり、彼女が或るときは

烏啼に協力しながら、後には烏啼と張合ってラジウムやお化け鞆やお化け猫の争奪に生命を賭けたことが判明した。

これで、鞆らしくない鞆の話は、すべて終わったわけであるが、気の毒なのは赤見沢博士である。博士は研究所を火災で失って、どうにも復興の見込みが立たず、あたら英才を抱いて不幸を歎いているという。しかし博士のことだから、そのうちにもっと何かいい手段を考え出すことだろう。博士が、この次に、重力消去装置をどんな方面に活用するかは、非常に興味あることだと思う。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第13巻 少年探偵長」三一書房

1992（平成4）年2月29日初版発行

※「深夜の研究室」において、小山嬢が綱を結びつけたところは、「壁際の鉄格子」と「飾椅子」の二つが示してある。矛盾しているが、底本のママとし、本文中には注記しなかった。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2001年7月21日公開

2006年7月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鞆らしくない鞆

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>